

# 「男運」の構造

## The structure of “luck with men”

村 上 幸 史

キーワード：「男運」、因果応報性、他者を見る眼

### 要 旨

一般的に語られる「男運」のよしあしが意味するものを探るために、どのような状況で「男運」という言葉が用いられるのかについて調査を行い、その構造について検討した。

その結果、「男運」の判断には2つの要因が絡んでいると考察された。1つは相手にめぐり合うことと出会う相手の条件は区別されており、その両方を満たさなければよいとは呼ばれていない点である。もう1つの要因は相手の条件だけではなく、出会う側の「いい人にはいい人、悪い人には悪い人がふさわしい」という因果応報的な意味合いが含まれている点である。これらのことが「他者が相手を見る眼」という、他者自身の選択に責任が帰される理由と結びついており、「男運」が語られる背景と関連している可能性が示唆された。

### 問題

一般的な占いを見ると、総合的な運勢を示した記述に加えて、「仕事運」や「金運」など特定の事象に関連した運勢があるかのように提示がなされている。このような記述では「仕事運は良くて、金運は悪い」のように、それぞれの運勢は相互に独立したものとされている。

村上(2002)は、この事象に限定された「運」を「個別運」と呼んでいる。しろうと信念的には、総合的な運勢と同じように、「個別運」もまた特定の運勢(状態)だけを指すだけでなく、個人ごとの「強弱」を示すような形で特性的に用いられている。

「個別運」の中でも恋愛に関する「運」(「恋愛運」)は、女性誌の占いには必ずといっていいほど設けられており(村上, 1998)、関心の高さが伺える。しかしながら、「恋愛運」とは別に「男運」という言葉があり、いわゆる『『ダメ男』を渡り歩く』女性の遍歴を描いたマンガである「だめんず・うぉ〜か〜」などに代表されるように、「男運」のよしあしは、日常生活の中でもしばしば語られているのではないかと推測される。

特に「恋愛運」は男女共通で用いられるのに対して、女性に対して用いられる「男運」という言葉は「女運」という言葉に比べて用いられる頻度が高く(例えば google で検索すると、検索結果の件数は「男運」が約160000件なのに対して、「女運」は約45000件と3倍以上も違う)、利用頻度の違いからも、関心の性差だけではなく、「男運」という言葉が特別な意味を持ってい

## 「男運」の構造

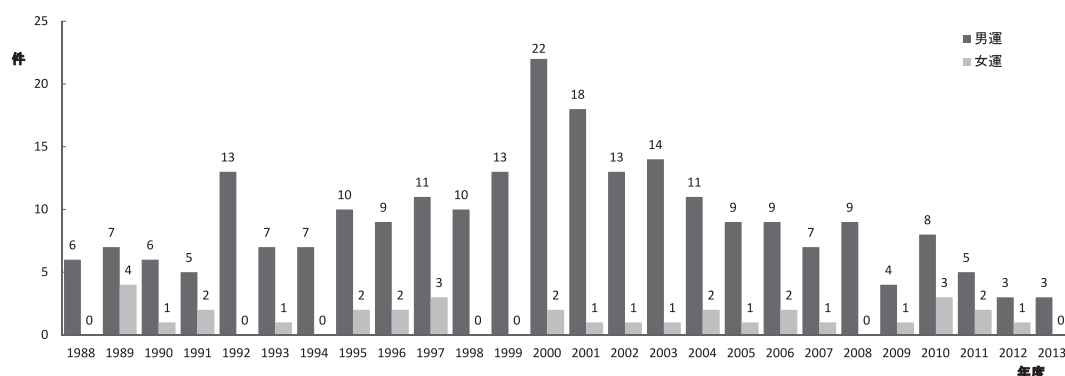


Figure1 雑誌における「男運」・「女運」の使用頻度（Web OYA-bunko から筆者が作成）

るのではないかと考えられる。

1986年度以降の一般的な雑誌における「男運」の使用頻度を見てみると、そのピークは2000年～2001年ごろのようである（Figure1）。この時期は、例えば *anan* という女性誌に『「男運」強化トレーニング』という特集号（2000年3月24日号）が組まれたり、先に紹介したマンガが話題に上ったりした時期に該当する。

しかしながら、現在でも「最後はあまりの強運に思わず、『これ男運持っていかれてますね…』と正気に戻っていた」（デイリースポーツ 2010年10月4日）のような形で用いられる例はしばしば見られる。また古くは大正時代にも用いられている例（「男運ばやり」（池田，1925））もあり、単なる流行語の範疇には収まらないだろう。

このように語られる「男運」のよしあしとは、いったい何を指しているのでしょうか。また語られる「男運」にはどのような特徴があるのだろうか。そこで本研究では、どのような状況で「男運」という言葉が用いられるのかについて調査を行い、その構造について検討した。

## 研究1

**目的** 「男運」という言葉が用いられる状況の特徴を調べるために、具体的な状況を質問紙に記述してもらうことで検討を行った。

### 方法

**回答者** 大学生・看護学生の女性40名（平均年齢21.5歳（ $SD = 3.94$ ））

### 回答項目

#### 1. 「男運」のよしあしに関する項目

①回答者自身が「男運」のよしあしを感じた経験、②回答者が他者に感じた「男運」のよしあしの経験、③回答者が、他者自身の「男運」のよしあしについて他者から語られた経験について、以上の3項目について、その判断理由や背景と共に、具体的に自由記述で回答を求めた。

## 2. その他の項目

回答者自身の特性的な「男運」のよしあしの程度（５段階、高いほどよいと判断）、「運の強さ」に関する程度（５段階、高いほどよいと判断）、運に関する態度項目、主観的な魅力の程度（「私の魅力は高い方だと思う」）、恋愛経験の豊富さ（７段階、高いほど豊富と判断）についても回答を求めた。

## 結果及び考察

### 記述の分類

回答された記述はのべ120事例であり、社会心理学専攻の大学院生２名に筆者を加えた計３名によって、項目ごとに KJ 法が行われた。分類結果は Table1～Table6 に示した。

Table1 自分の「男運が悪い」と感じた状況

N = 29

		N	代表的な記述
機会がない	男性と知りあう機会がない	4	「であいが他の人よりあまりないので」
理想の機会がない (出会いはある)	片思い	4	「好きになる人には好きになってもらえない」
	好きでない人から誘われる	4	「自分が苦手な人に限って気に入られる」
	理想の人に巡り会えない	2	「いい男にめぐりあえない」
つきあいへの不満	つきあいが続かない	2	「いい人がいてつき合っても、続かない」
	つきあう人がダメ男	12	「実はだらしない人ばかり、好きになってしまう」
後から未練	後から未練	1	「別れた人はみんないい人生を送ってんだもんね」

Table2 他者に対して「男運が悪い」と感じた状況

N = 36

		N	代表的な記述
つきあうまでいかない	つきあうまでいかない	2	「いい年なのに結婚していない人を見るととき」
理想の機会がない (出会いはある)	片思い	4	「恋には進展せず、友達で終わってしまう」
	好きでない人から誘われる	1	「メガネに好かれる子」
	魅力的なのにふさわしい 彼氏ができない	8	「私から見て顔もきれいで性格もいいのに彼氏ができない」
恋に恋している	恋に恋している	1	「ほれやすい。周りの男のことをすごくよく知っている」
つきあいへの不満	相手に浮気される	9	「何度も浮気されているにも関わらず、謝ったら許してしまう」
	付き合う人がダメ男	4	「相手にいつも何かしらの問題がある」
	相手に振り回される	4	「都合のいいように使われる子。どんなにいじめられても好きだからついていっちゃう」
つきあいが続かない	遠距離	1	「遠距離になる」
	つきあうとすぐ別れる	2	「付き合ってはすぐ別れの繰り返しの友達がいて」

Table3 他者から他者自身の「男運が悪い」と言われた状況

N = 16

		N	代表的な記述
つきあうまでいかない	つきあうまでいかない	1	「気をもたされるのに恋人関係まで発展しない」
理想の機会がない (出会いはある)	いい出会いがない	2	「恋人になりたいほどの男がいない」
	相手がいる人を好きになる	1	「好きになる人ほとんどに相手やおくさんがいる」
つきあいへの不満	相手に浮気される	5	「付き合うとうまくいなくて、冷たくされたり、浮気されたり」
	付き合う人がダメ男	5	「高収入だった職をやめたりする」
つきあいが続かない	遠距離	1	「遠距離である」
	つきあうとすぐ別れる	1	「付き合うとすぐに別れたりすること」

Table4 自分の「男運がいい」と感じた状況

N = 15

		N	代表的な記述
継続している	途切れない	2	「「男」という存在の必要性に不自由したことがない」
	モテモテ	1	「複数の人に思いを寄せられた」
	今の関係に満足している	4	「長期間付き合っ相手がすごく大事にしてくれるのが伝わってくる」
いい条件	特別扱いを受けた	1	「他の人からは断り続けているのに自分は付き合ってもらえた」
	付き合う人はみんないい男	3	「人々から信頼も人気も厚い人と付き合う確率が高い」
	いい男と巡り会った	4	「一筋」「経済力」

Table5 他者に対して「男運がいい」と感じた状況

N = 20

		N	代表的な記述
継続している	良好な関係が続いている	2	「結婚がうまくいっている」
	途切れない	4	「別れてもすぐ次がいる」
	モテモテ	2	「何故かやけにモテるから。選り放題だから」
	常時幸せそう	3	「幸せそうな友達を見たとき」
いい条件	いい条件の人とつきあえる	5	「性格のいい人が彼氏になったり、一途な人になる」
他者の相手からの視点	相手が夢中	2	「相手を夢中にさせている」
	彼女が性格が悪い	2	「性格の悪い女の子が、いい人と付き合っているとき」

Table6 他者から他者自身の「男運がいい」と言われた状況

N = 4

		N	代表的な記述
継続している	途切れない	1	「男まわりがいい」
	常時幸せそう	1	「別れや新しい恋の話をしていたとき」
いい条件	いい条件の人とつきあえる	2	「一筋・経済力」

まず「男運」として連想された内容を見ると、1例を除いて恋愛に関する内容が挙げられていた。事例の数だけを単純に比べると男運が「悪い」という事例(81例)は「いい」という事例(39例)よりも多かった。またどちらの事例も、回答者が他者に感じた経験が最も多く、それに比べて、他者自身の「男運」のよしあしについて他者から語られた経験は少なかった。

分類された内容が示すように、回答者自身や回答者が他者に感じた経験、他者から語られた経験の内容は一貫しており、「男運」を語るのは付き合う前と付き合った後の内容に大きく分類される。

特に事例の多かった「男運が悪い」という事例を見てみると、付き合った後の時期に該当する記述内容は「相手に感じる不満」であるのに対して、付き合う前では「出会い自体がない」ことと「いい出会い」との複合的なものであった。つまり相手と出会う機会がないことと、自分にふさわしい相手と出会わないことという両方の理由が挙げられていた。ただし純粋に出会い自体の有無だけが理由とされていたのはごく少数であった。この理由は最後に考察する。ちなみに「男運がいい」と感じた状況は、関係の継続と相手の長所をあげたものがほとんどであった。

回答者が判断した自身のよしあしに関することと、他者に感じた状況との違いは他者に関する魅力の言及であった。Table2の「魅力的であるのにふさわしい彼氏ができない」というカテゴリがそれに該当する。

このことから他者に向けられた「男運が悪い」の意味は3通りあり、他者を感じている魅力に反して、つきあった相手に突発的に不幸な事件(事故に遭うことや会社の倒産など)のような何らかの障害が生じたこと(外的要因)、つきあった相手が暴力癖を持っていたり、他者に金をたかる、すぐに仕事をやめてしまうなどのネガティブな特性や行動を有していたこと(つきあう相手の責任)だけではなく、容姿や地位などに惹かれやすく「他者が相手を見る眼がないのでは」という、他者自身の選択に責任を帰している面があると考えられる。

例えば結婚相手に関する疑惑報道が、過去の交際相手に関する情報と合わせて説明されている記事(サンデー毎日 2011年3月27日号)などは、選択の責任を帰している例であると言えるだろう。

## 他の項目との関連

「男運」のよしあしの程度について、自己評定の平均値は2.92( $SD = 1.09$ )であった。この程度に関して、年齢( $r = .04$ )や恋愛経験の豊富さ( $r = -.15$ )との相関は見られなかった。恋愛経験の豊富さに関する程度の平均値は4.42( $SD = 1.48$ )であり、年齢との相関は見られなかった( $r = -.01$ )

ただし、主観的な魅力の程度と「男運」のよしあしの程度の間には高い負の相関が見られた( $r = -.62$ )。つまり自己の魅力が低いと判断している者ほど、「男運」の程度が悪いと判断して

いた。主観的な魅力の程度の平均値は2.92 ( $SD = 1.63$ ) であった。また「運の強さ」に関する程度とも相関が見られた ( $r = .46$ )。つまり「運が強い」と認識する者ほど、「男運」の程度もよいと認識していた。

## 研究2

### 目的

研究1の結果をふまえて、研究2では「男運」のよしあしの認識に影響を与える要因について、更なる検討を行うために質問紙調査を行った。

### 方法

**回答者** 大学生・看護学生の女性28名（平均年齢26.7歳 ( $SD = 6.19$ )）

**回答項目** 研究1で回答してもらった項目のうち、その他の項目に加えて、交際している人（配偶者含む）の有無、交際人数、恋愛や交際に関する因果応報的な考え方に関する項目（「今は恵まれなくても、いい人にはいい出会いがあるはずだ」「相手を見る目など『男運が悪い』のは本人の責任も大きいと思う」、各7段階）についても回答を求めた。主観的な魅力の程度については、内面と外面に分けて、それぞれ尋ねた。

加えて Lee (1977) の恋愛の色彩理論に基づいて作成された、恋愛傾向測定尺度の日本語版（松井ら、1990）にも回答してもらった。

### 結果及び考察

「男運」のよしあしの程度について、自己評定の平均値は2.89 ( $SD = 1.06$ ) であった。この値は研究1とほぼ同じであり、年齢層が少し高いが、ほぼ同等のサンプルとみなして、以下分析を行った。

まず交際している人がいる割合は46.4%（既婚者が25.0%）、交際人数の平均は6.19名 ( $SD = 7.06$ ) であった。これらの変数と「男運」のよしあしの程度の認識についての関連性については、既婚者や交際相手がいる者の方が程度は高かったが、有意な差は見られなかった（婚姻歴： $F(1, 26) = .50, n.s.$ ；交際相手： $F(1, 26) = 2.87, n.s.$ 、Table8 参照）。交際人数と「男運」のよしあしの程度の相関は  $r = -.02$  であった。

また、この調査では主観的な魅力を内面と外面に分けて尋ねているが、両者の相関は  $r = .49$  と中程度の関連が見られたが、内面的魅力と「男運」のよしあしの程度の相関は  $r = -.22$ 、外面的魅力と「男運」のよしあしの程度の相関は  $r = -.21$  と関連は小さかった。

次に Lee の恋愛傾向測定尺度を得点化し、それぞれ「男運」のよしあしの程度との相関係数を算出したところ Table7 のように、エロス（情熱的）、ストーゲイ（友愛的）、アガペー（利他的）得点のそれぞれが高いほど「男運」がよいと認識しており、逆にプラグマ（実利的）得点が高いほど「男運」が悪いと認識していた。このことから分かるのは献身的な女性は実際には

Table7 「男運」の程度と恋愛傾向測定尺度得点との相関

エロス得点	ストーゲイ得点	ルダス得点	アガペー得点	マニア得点	プラグマ得点
.41	.47	-.29	.35	.23	-.45

Table8 交際歴ごとの「男運」の程度の平均値

既婚	未婚	交際相手なし	交際相手あり
3.14	2.81	2.54	3.20

満足度が高く、「男運」が悪いと認識しているというのは俗説であり、逆に容姿や地位や収入などの特定の条件で相手を選択することは要求水準を高め、結果的に満足度を低下させることを示しているのかもしれない。

最後に恋愛や交際に関する因果応報的な考え方に関する項目について、「今は恵まれなくても、いい人にはいい出会いがあるはずだ」の平均値は3.04 ( $SD = 1.64$ )「相手を見る目など『男運が悪い』のは本人の責任も大きいと思う」の平均値は2.36 ( $SD = 1.06$ )と、個人に責任を課す傾向が強かった。ただし、これらの項目は自己の「男運」のよしあしの認識とは関連が見られなかった ( $r = -.04$ ,  $r = .10$ )。

## 総合論議

以上から「男運」の判断には、2つの興味深い要因が絡んでいると考えられる。1つは相手にめぐり合うことと、その相手のよしあしを区別して、その両方を満たさないと「男運がいい」とは呼ばれていない点である。例えば「金運」ではお金自体のよしあしは問わない<sup>1)</sup>のに対して、「男運」で語られる相手は出会うだけではなく、そのよしあしも重要視されていることは非常に興味深い特徴である。

2013年の内閣府による調査（「家族と地域における子育てに関する意識調査」）でも、結婚を決心した状況に関して、男性は「異性と知り合う（出会う）機会があること」という出会い自体に重点を置いているのに対して、女性は「希望の条件を満たす相手にめぐり会うこと」という出会いと相手の質の両方を重視するという、認識に性差があることが指摘されている。「男運」が「女運」と異なる用いられ方をしていることを示す例であろう。

もう1つの興味深い要因は、「男運」の判断には出会う相手の条件だけではなく、出会う側の条件である、「いい人にはいい人、悪い人には悪い人がふさわしい」という意味合いが含まれていることである。例えば、他者の「男運がいい」と感じた記述の中の「性格の悪い女の子がいい人と付き合っているとき」という記述はこの認識を顕著に示している。

全体としては、このよしあしが指しているものが、容姿なのか、内面なのかは明確ではないが、このような因果応報的な考え方は、内面と外面の違いはあるが、Berscheidら（1971）のマッ



チング仮説に類似している。「男運」に限らず「運」に関するしろうと信念の大半は、努力と結びつきが強く因果応報的である（村上，2002）。

このことは裏を返せば、「男運」という言葉を用いた時に、純粹に出会いがないというよりも、むしろ自分に見合った、あるいは「ふさわしい」相手を選んでいる場合があることを示唆する。純粹に出会いがないのではなく「選んでいると思われたくない」、あるいは相手を見る目がないというように、「男運」のよしあしが選択者の責任に帰される面を考えれば、他者自身の経験について「いい出会いがない」ことが、あまり他者に語られない理由にあるのかもしれない。これはあえて「男運」という説明をする背景には、偶然性よりも他者を見る眼の方に重点が置かれていることを示唆していると考えられる<sup>2)</sup>。

ただし自分の魅力と「男運」の程度との相関が高い、つまり「魅力と反比例して、男運が悪いとは認識していない」という結果からは、全体として自分自身の魅力の高さに釣り合った相手が現れない（選んでいる）ために、自分の「男運が悪い」と判断している可能性は小さいと言える。「自分の魅力に自信を持っている者が、他者に『男運が悪い』と語っている」というのは一般的な俗説かもしれない。

選択という点では、山田（1996）も未婚化・晩婚化が進む理由として、女性が自分にふさわしい人が現れるのを待つようになったことを「もっといい人がいるかもしれないというシンδροーム」と表現している。同時に出会いを「運」に頼ろうとする傾向が強くなったことも指摘されているが、女性の方が占いを好む理由として、偶然の要因に左右されやすいという意見や、いわゆる「ダメ男」の存在は昔から指摘されていた要因である。そのため2000年ごろの「男運」のブームは、むしろ女性が男性を選択する立場になった社会の傾向を示すものであると考えられる。選択できることはメリットでもあるが、選択する主体に責任が課されるというデメリットも同時に背負うことになる。

さらに Match.com（2005）の調査によれば、30代独身女性の未婚理由の第一位は「運命の人に会わなかったから」であり、「男運」が頻繁に語られるようになった背景としては、出会いが偶然性に左右されることよりも、むしろ普通の出会いよりも、偶然の出会いというラベル付きの出会いが価値を持つような、偶然性に特別な価値が付与されていることが挙げられるかもしれない。

最後に、これらの構造について時間を軸にした「男運」に関するモデル図（Figure2）を作成してみた。横軸は恋愛経験であり、縦軸は「男運」のよしあしの認識を仮定している。「出会いがない」状態よりも、付き合いが良い時期の方が当然「運がよい」という認識は強いのだが、相手が「ダメ男」とであると判明したことで認識は反転する。右の延長部分の線分が点線になっているのは、理想のゴールを仮定しているからであり、このゴールは「出会いがないこと」という出会いの有無と、「相手がダメ男である」という相手のよしあしとの相対的な位置付けがなされている。そして、自分の魅力に関する認識は理想のゴールを高くする代わりに、要求水準



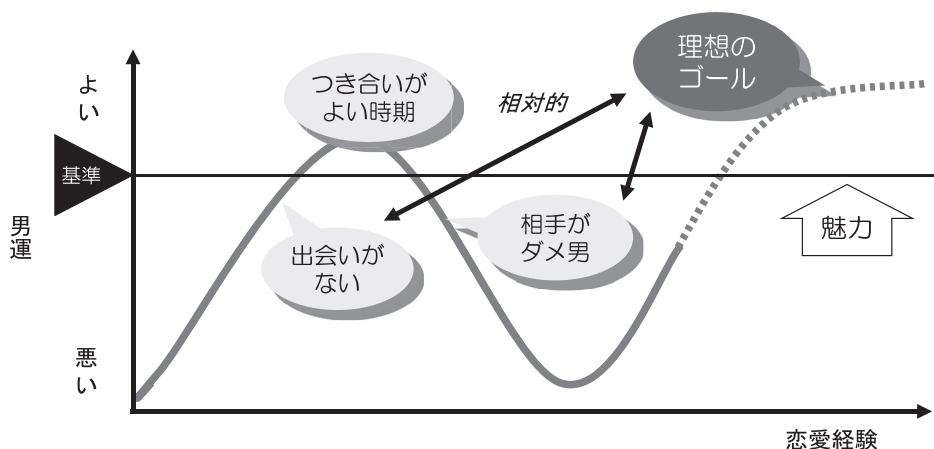


Figure2 「男運」に関するモデル図

を高くする機能を持っているのかもしれない。この背景にあるのは「いい人にはいい人」という因果応報説の存在である。

この調査では、自分の「男運」のよしあしについて他者に語ることを、他者から（他者自身について）語られた経験という形で測定した。これは自己の運に関して他者に語ることが別の意味を派生させることを考慮したものであるが、語られるのは特定の他者に対してであり、語られた経験が少ないことは実情を反映したものとは限らないかもしれない。「男運」と主観的な要因との関係はある程度明らかになったが、他者に語るという点については、他者の運のよしあしを（その他者や第三者に）どのように語るかという側面も含めて、更なる検討が必要になるだろう。

## 注

- 1) 「あぶく銭」のように、入手方法に言及することはあるが、「金運」はあくまで巡りあわせを指しており、入手方法と運とは直接関連がない。この意味で「男運」は「よい男運」というべきであろう。
- 2) この点では冒頭で紹介したマンガである「だめんず・うぉ〜か〜」では「男運」そのものに言及はされていないが、半ば自虐的に「男を見る目がない女の会」（第1巻、p.6）と説明がなされている。

## 引用文献

- anan 編集部 (2000). この一冊で、念願達成！「男運」強化トレーニング。 3月24日号
- Berscheid, E., Dion, K., Walster, E., & Walster, G. W. (1971). Physical attractiveness and dating choice: A test of the matching hypothesis. *Journal of Experimental Social Psychology*, 7, 173-189.
- 池田大吾 (1926). 男運ばやり 演劇新潮 (文春)
- 倉田真由美 (2001). だめんず・うぉ〜か〜 第1巻 扶桑社
- ひな婚の南野陽子に離婚危機「ナンノは男運がない!？」との声 (2011). サンデー毎日 3月27日号, p.37
- Match.com International (2005). 第1回 Match.com 愛の調べ

「男運」の構造

Lee, J. A. (1977). A typology of styles of loving. *Personality and Social Psychological Bulletin*, 3, 173-182.

松井豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美 (1990). 青年の恋愛に関する測定尺度の構成 東京都立立川短期大学紀要, 23, 13-23.

村上幸史 (1998). ツキの流れは占いで読む!? 運に関する信念における占いの情報的影響 日本社会心理学会第39回大会論文集, 250-251.

村上幸史 (2002). 「運の強さ」とその認知的背景 社会心理学研究, 18, 11-24.

内閣府 (2014). 平成25年度「家族と地域における子育てに関する意識調査」報告書

<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h25/ishiki/pdf/gaiyo.pdf> (2014年10月10日)

山田昌弘 (1996). 結婚の社会学—未婚化・晩婚化はつづくのか 丸善ライブラリー (新書)

“予想の女神” 小森純が初競馬当てた～ (2010). デイリースポーツ 10月4日